氏名（本籍）	若槻量子（徳島県）（ワカツキリョウコ）			
学位の種類	博士（音楽）			
学位記番号	博音第 52 号			
学位授与年月日	平成15年 3 月25日			
学位論文等題目	〈論文〉スブレット			
論文等審査委員				
（総合主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	鈴木寛一
（演奏審査主査）	〃	〃	（〃）	鈴木寛一
（演奏副査）	〃	〃	（〃）	峰村貞子
（〃）	〃	〃	（演奏芸術センター）	實相寺昭雄
（〃）	〃	〃	（音楽学部）	高橋大海
（論文審査主査）	〃	〃	（〃）	鈴木寛一
（論文副査）	〃	〃	（〃）	峰村貞子
（〃）	〃	〃	（〃）	高橋大海
（〃）	〃	〃	（演奏芸術センター）	實相寺昭雄

（論文内容の要旨）

本論文は、「スブレット」が演劇からオペラの分野にいつどのように流入したのかという点に焦点を当てながら、喜劇そのものの発生から辿って20世紀までを概観し、そこに浮かび上がるこの役柄の本質と音楽的特徴及び演奏法を検証することを旨とする。

この論題について、下記のように章立てし、論じていくこととする。

第１章　演劇スブレットの誕生

まず、ギリシャ喜劇発生時から中世までにおいて、どのような娘役が喜劇史の中で存在していたのか、演劇界のスブレットにおけるその前身の姿を、この時代の社会背景と共に触れる。その後16世紀、コンメディア・デッラルテにおいて、スブレットの直接的前身である、コロンビーナが登場する。その時代の社会背景と共にコンメディア・デッラルテについて、及びコロンビーナについて詳説し、またこの時代におけるイタリア周辺の喜劇についても述べる。次に18世紀の市民台頭社会へ変貌していく社会について述べ、そこにおける市民階級の女性達の変化そして、その後それをいち早く戯曲化したモリエール、またその同時期にパリで活躍したコメディ・イタリエンヌと、その中のコロンビーヌ役について述べ、かつその後誕生したコメディ・フランセーズにおけるマリヴォー、ダンクールらの活躍などによる演劇スブレットの確立について述べる。また、新コメディ・イタリエンヌが再びパリに登場し、その後町のドラム・フォラン（縁日芝居）において、シャルル・シモン・ファヴァール等がコメディ・メレ・ダリエットを作り、より一層

音楽に重きを置いたことから、結果オペラ・コミークが生まれたこと、そのようにして喜歌劇が喜劇から分離していき、その過程において、つまり音楽付きの演劇から演劇付きの音楽へと変容する際に、スブレットがオペラ界に流入されていった展開について述べる。

第２章　オペラにおけるスブレット

ここでは時代毎の象徴的なスブレット役の､音楽的特徴と演奏法について分析し検討していく。最初に17世紀の「オペラ」が生まれた社会背景、及びオペラ・ブッファが誕生する先駆けとなったマドリガル・コメディ、インテルメディオについて述べ、16世紀末オペラが誕生した瞬間について述べる。主にインテルメッツォとオペラ・ブッファの誕生について、音楽の世界に入ったスブレットが、様々なインテルメッツォにおいて発展していく様子及び、ナポリ楽派における偉大な喜劇作家、ゴルドーニにについても触れる。その後天才モーツァルトの出現によって、音楽的にも性格的にも、スブレットが急激な成長を遂げた様子について詳説し、また産業革命以降、機械化によって大きく変化していく19世紀の社会背景と、脇役スブレットから主役級のスブレットが、19世紀イタリアのオペラ・ブッファの中で誕生し、ドイツ及びウイーンにおいてジングシュピール、フランスではオペラ・ブーフ、ウイーンではオペレッタ、イギリスにおいてはサヴォイ・オペラとして開花していったその変貌について述べる。更にはビゼーの《カルメン》による、次の20世紀における近現代のスブレットの幕開けについて詳説する。そしてＲシュトラウスの復古主義によるスブレット作品について述べ、20世紀の社会について説明するとともに、時代の影響で、スブレットがただのお色気担当のみに堕落していき、更に近現代におけるスブレット（オペラ）が、なぜどのように飽和していくことになったのかについて言及する。

結論として、上記のような演劇におけるスブレットと、オペラにおけるスブレットの分析解明により、つまりは「スブレット」が演劇からオペラにそのまま取り込まれた事を述べ、そのような歴史的事実から、本来のスブレットの全容を明らかにしてそれを定義づけ、また様々に存在する「オペラ」におけるスブレット役の、演劇的、または音楽的共通項を列記することにより、その特徴から一つの「スブレットのあるべき演奏法」について述べるものである。